

III まとめ

～JSL研修会プログラムと活用の提案～

センターJSL研修会 各コースが目指すもの

Aコース：外国人児童生徒等に関わる際に必要となる基本的な情報と、ネットワーク構築の機会を提供する。教員・支援員が「子どもたちが学級での教科学習に参加することを支える」ことを支える。

Bコース：学校や地域の核となって、JSLカリキュラムを推進できる人材を育成する。

管理職・指導主事コース：外国人児童生徒の状況を理解し、積極的にかれらを支える体制を作ること、支援にあたる教員・支援員を支えることの重要性を理解する管理職・指導主事を増やす。

2019年度JSL研修プログラム Aコース

- 第1回 講義1 外国人児童生徒教育の現状と課題
講義2 年少者への日本語教育と指導担当者の役割
事例紹介 日本語教室での指導について
日本語指導・教科指導・学級経営
- 悩み相談の機会
- 事例
- 情報提供
- 情報提供
- テーマ別交流会

- 第2回 講義 日本語指導プログラムとJSLカリキュラムの考え方
(含：日本語初期指導の事例)
- 事例

事例紹介 JSLカリキュラムの事例（国語・社会・理科）

活動

ワークショップ 授業づくり① 目標を立てる

- 第3回 講義 JSLカリキュラム授業づくりの視点と指導計画
- 情報提供

活動

ワークショップ 授業づくり② 課題の検討とまとめ

2019年度JSL研修プログラム Bコース

- 第1回 事例紹介 JSLカリキュラムの授業づくり
(含：JSLカリキュラムの考え方)
- 授業づくりに特化

ワークショップ 授業づくり① 目標を立てる

- 第2回 ワークショップ 授業づくり② 国語／社会の授業づくり

- 第3回 ポスターセッション

2019年度JSL研修プログラム 管理職コース

- 講義・事例紹介はAコースと合同

※経験の長い参加者はBコース

- ワークショップの時間は「地域の課題」「研修の在り方」についての意見交換、研修づくりの活動

「初回のみ」の参加が多かったが、2017年以降、通年でコース設置。

地域の研修づくり

～JSL研修会プログラムをもとに～

現行の国際教育センターJSL研修会は、
内容によって大きく2種類に分かれる。

1. 担当初任者のための基礎講座
 - ・ 外国人児童生徒教育の現状と課題
 - ・ 国際教室担当者の役割
 - ・ 年少者の第二言語習得
 - ・ 日本語指導の方法 (JSLカリキュラムの考え方)
 - ・ 日本語力の把握と指導計画作成の重要性
2. JSLカリキュラムの授業づくり

1 基礎講座の内容

文部科学省 (2016)

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345412.htm

日本語教育学会「文部科学省委託 外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」
ホームページ

<https://mo-mo-pro.com/>

内容	研修マニュアルの項目例	文科省「モデルプログラム」の項目 (2019年7月版) 例
外国人児童生徒教育の現状と課題	I.1.4 外国人児童生徒教育の重要性 I.2.1 外国人児童生徒の母語・母文化について	文化間移動とライフコース (A) 外国人児童生徒等の現状と背景 (B) 子どもの文化適応 (E)
国際教室担当者の役割	I.1.3 担当者の役割 I.2.2 生育歴/学習歴 I.3.1 児童生徒の行動とその背景 I.3.2 児童生徒に接する姿勢 III.2.2 編入した児童生徒への働きかけ IV.1.1 学級担任との連携	校内の指導体制 (C) 共感と受容 (D) 言語環境と言語使用 (E) 日本語プログラム (I) 在籍学級での学習支援 (J) 地域支援者・異領域との連携 (L)

内容	研修マニュアルの項目	文科省モデルプログラムの項目
年少者の第二言語習得	I.4.1 日常会話と学習言語能力について I.4.3 言語の獲得と考える力の発達	母語と第二言語の関係 (E) 子どもの言語発達 (F) 言語能力の捉え方 (F)
日本語指導の方法 (JSLカリキュラムの考え方)	V.3.1 ことばの力と教科学習 V.3.2 授業づくり	日本語のコース設計の手順 (I) 日本語プログラム (I) 現場の状況に応じた指導・支援 (M)
指導計画の作成、日本語力の測定	V.1.1 実態把握と目標設定	言語能力の測定法 (F) 個別の指導計画の作成 (I)

注 外国人児童生徒教育研修マニュアルについて
「研修マニュアル」では各項目の内容を簡単に説明しています。ただし、DLA、特別の教育課程とも未発表であったため、これらには対応していません。

初任者用研修プログラム例

1. 短時間の講義で (2時間×1回)

	内容	担当者	時間
1 説明	地域の外国人児童生徒在籍状況、指導・支援の体制等	担当指導主事	20分
2 講義	外国人児童生徒等教育の基本事項 (例) ・ 施策の動向 ・ 母語母文化の重要性 ・ 日本語プログラムについて ・ 担当者の役割	外国人児童生徒教育に関わる… ・ 研究者 ・ NPO等のメンバー ・ 近隣の教員・支援者 (指導主事も)	80分
3 質疑とまとめ	講師への質問 指導主事からのまとめと参加者へのメッセージ	指導主事	20分

2. 夏休み等の1日研修（5時間×1回）

	内容	担当者	時間
1 2	プログラム例1の1, 2を2時間で実施		
3	事例紹介 国際教室担当者の役割（例） ・日本語/教科指導 ・学級の運営 ・連携の方法 + 質疑	経験の長い担当者 地域で日本語支援にあたっている方に話を聞くこともできる	60分 + 20分
4	話し合い 参加者間の課題の共有 + 講師等からのコメント	2, 3の講師、指導主事	60分 + 20分
5	まとめ これからの指導に向けて	指導主事	20分

3. 複数回の研修（2時間×複数回）

第1回 プログラム例1を実施

第2回以降は、現場の課題に即してテーマを選択

- ・事例紹介と課題共有の話し合い
例：国際教室担当者の役割／校内体制づくり／保護者との連携
- ・指導の実際とミニワークショップ
例：日本語指導、教材作成、日本語力測定（DLA）
- ・講義
例：「元・外国人児童生徒」、保護者、地域の支援者による体験談、ソーシャルワーカー・カウンセラーとの情報共有
- ・授業参観
経験の長い担当者の授業を参観、または映像を視聴

4. 外部講師を呼ぶことが困難な場合／自己研修のための参考資料

- ・ 外国人児童生徒受入れの手引き（文部科学省、2019）

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm

- ・ かすたねっと（外国人児童生徒支援情報検索サイト）

<https://casta-net.mext.go.jp/>

※ センターJSL研修会で配布する参考資料

← アップデートして公開を目指します

【講師を探す】

- ・ 近隣の大学、国際交流協会、外国人支援をしているNPO団体に聞く
- ・ 外国人児童生徒支援に積極的な自治体から招く
- ・ 学校や地域で指導・支援をしている教員・支援者を招く
← 初任者のための研修では、「少し先輩」の話が有効！

2 「授業づくり」の研修

- ・ センターJSL研修の検討過程から見た「授業づくり」研修の基本パターン

① プログラムや背景となる理論についての理解

② 授業づくり体験

③ 授業・授業づくりの振り返り・検討

⇒ 特に、②③については、ニーズ、時間、講師や指導者、参加者の経験などを配慮して、柔軟に研修を組む必要がある

【講師について】

- ・ 指導経験の長い地域の担当教員・支援者に依頼
← 継続性の観点から地域の人材を積極的に活用することが望ましい
- ・ 外国人児童生徒支援に積極的な自治体、大学やNPO団体から招く

- ・センターJSL研修の検討過程から見えた「授業づくり」研修のポイント
 - ① プログラムや背景となる理論についての理解
 - ・ JSLカリキュラムだけでなく、「サバイバル」「日本語基礎」「技能別」の授業づくりの必要性が高いケースも
 - ・ 講義でなく、事例紹介を通して理解することも
 - ② 授業づくり体験
 - ・ ①で「授業づくり」の視点を共有することが重要
 - ・ 可能であれば、「グループ活動⇒一人で」の流れで
 - ③ 授業・授業づくりの振り返り・検討
 - ・ 率直な意見交換ができる環境を

2 「授業づくり」の研修 活動例

1. 支援の仕方について学ぶ

- ① ベテラン担当者の授業で見られた支援について、グループで話し合う
- ② 自身の授業計画を、「支援」の視点から再検討する

2. 地域の日本語支援者から学ぶ

- ① 初期指導について、話を聞く／事例を知る
- ② 文型を一つ選び、学校種・学年等に分かれて指導計画を立てる
- ③ 共有する

3. 実施した指導案を持ち寄って検討する

- ① グループに分かれ、実施した授業について報告する
※使用した教材、成果物があるとなおよい
- ② 子どもの実態に照らして、支援の有効性や、教材の工夫などについて相互に検討する

4. 教材を作成し、共有する

- ① 子ども像（学年、出身国、日本語力、母語での学習歴など基本的な実態）を設定する。教科／単元を設定する。
- ② グループにわかれ、必要な教材を作成する。←全グループ同じ単元に取り組む
- ③ 作成した教材と、その理由、どのように使うかを紹介し合い、検討する

最後に

国際教育センターのJSL研修会では、
「誰でも参加できる」ものであるため、
地域のニーズに合わせることは難しいところがあります。

地域の特徴（支援体制、支援・研修のためのリソース等）から
教員に必要な情報を選び出し、
担当者としての力を育てていくことが必要かと思えます。

ご清聴 ありがとうございました。

東京学芸大学国際教育センター 菅原雅枝

プロジェクトメンバー

市川昭彦（大泉町立北小学校教諭）

伊藤敦子（小牧市立大城小学校教諭）

今澤 悌（甲府市立大國小学校教諭）

大菅佐妃子（京都市教育委員会副主任指導主事）

小川郁子（都立高校講師）

濱村久美（江戸川区立葛西小学校教諭）

オブザーバー

横溝亮（横浜市立並木第一小学校教諭）